

岩波
講座

日本文学史 第十六卷 一般項目

アイヌの文学

知里真志保

岩波書店

アイヌ文学

知里真志保

目次

一 序言	三
二 コタンカルカムイの創造を語る神話及び伝説	四
三 コタンカルカムイのイム	六
四 イムの起原	二一
五 コタンカルカムイの異名とその語原	二四
六 神謡の起原	二二
七 コタンカルカムイの正体	二四
八 余説	二五
参考文献	二七

一 序 言

北海道日高国沙流郡に於てカムイオイナと称せられる譚い物の中に次の様な一節が見出される。

tan aynu-mosir

この人間世界は

Kotan-kar-kamuy

コタンカルカムイが

kan ruwe ne.

造ったのである。

pasasno mosir,

荒涼たる国土で、

ni ka isam,

木もなく、

mun ka isam.

草も無かった。

その荒涼たる国土の上に山や谷や川や沼を造り、木や草を生やし、鳥獸魚介を住ませ、人間を造ってそれに生殖の道や生活の方法を教えたのが、コタンカルカムイであった。コタン・カル・カムイとは、「コタンを・造った・神」の義で、いわばアイヌモシリ——人間世界——の草分けの神である。ところがそのように重大な神であるにもかかわらず、その正体が一向に明かにされていないのは不思議である。アイヌの神といえたいてい実体があり、例えばキムンカムイ(kim-un-kamuy 山の神)は熊、レブンカムイ(rep-un-kamuy 沖の神)は鮭、ワッカウシカムイ(wakka-us-kamuy 水の神)は針金虫、シリコルカムイ(sir-kor-kamuy 地の神)は立木、カントコルカムイ(kanto-kor-kamuy 天の神)は竜、パコルカムイ(pa-kor-kamuy 季節の神)は或種の渡り鳥であるという様に、それぞれはっきりした実体をもっているのに、この神はその点になると模糊として歴史のあけぼのの霧の彼方に隠れてしまうのである。その霧を払い、この神の素性を洗って、その正体を明かにしようとするのが本稿の目的である。この神の正体を明かにす

ることによって、アイヌ文学の発生の径路及び性格を明らかにすることができると思うからである。

註

- 1 アイヌの神謡は、その主人公の種類によって二種に分けることができる。(イ)自然神——例えば熊・狼・狐・エゾフクロオ・アホウドリ・蛇・蛙・沼貝(カワシンジュガイ)等の動物神、トリカブト・オオウバユリ・アララギ等の植物神、船・罫等の物神、其の他火神・風神・雷神等——が主人公となって現われて自らの体験を語る形式をとるもの。(ロ)人間の始祖たる半神半人の英雄神オイナカムイ(アイヌラツクル、オキクルミ)が主人公となって現われて自らの体験を語る形式をとるもの。以上(イ)(ロ)を一括して多くの地方ではオイナと称するのであるが、北海道南西部の胆振及び日高の沙流地方では(ロ)のみをオイナと称する。(イ)(ロ)を包括する意味のオイナを神謡と訳し、(ロ)のみを意味するオイナを聖伝と訳す。そして聖伝の内、オイナカムイの出自の天界の神々の系譜を語る一篇を特に神聖視してカムイオイナ(kamuy-oyna「神聖なる・聖伝」≡神伝)と称する。

二 コタンカルカムイの創造を語る神話及び伝説

本論に入る前に、この神に関する神話や伝説の類を若干紹介して足がかりにしたいと思う。コタンカルカムイが人間世界を創造した神話及び伝説は各地にいろいろ語り伝えられている。

- (一) 大昔、この世がまだ無かった時、大海の表に、ただオプタテシケ——大雪山だけが水から頭を出していた。コタンカルカムイはその妹と共にその頂に降臨し、雲を埋めて陸地を造った。その際、黒雲は岩となり、黄色い雲は土となり、そして山や川や島々や国々が出来た。だから、今でも山頂の巨岩には雲がたなびくのである(日高国沙流郡の伝承)。

- (二) コタンカルカムイが始めて人間を造る時、何で造ったらいいかと雀を使って天の神の意をうかがわせた。天の

神は木で造つたらいいと答えたが、後になって石で造つた方が堅固でいいと考え、カワウソを呼んで、急いで下界に下り、コタンカルカムイにその旨を伝えるように命じた。然るに、カワウソは途中で魚の群れている淵にさしかると、使命を忘れて夢中になって魚を追っかけまわし、そのために遅くなつて伝令が間に合わなかった。それで人間は遂に木で造られてしまい、そのため誰ひとり不朽の命を保つ者はない。けれども、あとからあとから生じ、且つ生長し、また増殖するのも、そのためである。尚、その時天の神が怒つてカワウソの頭を踏んだので、カワウソはあのように頭が圧しつぶされた様になっているのである。また一説には、その時人間を造つた木は柳であつたから、人間は年をとると柳の木の撓むように背が曲るのだともいう(日高国沙流郡の伝承)。

(三) 太古、コタンカルカムイがコタンを造つた際、人間の隠し所を何処に設置すべきかに迷い、カワウソを派して天神の神意をうかがわしめた。天神が思うには、「カワウソという奴はひどく忘れっぽいから、ありのままに言えばあべこべに伝えるだろう。だから、ひとつ、あべこべにいつてやろう!」そう考えたので、「人間の隠し所は前額部に置くに限るよ」と教えた。カワウソは畏まってコタンカルカムイのもとへ帰つて来たものの、天神の教えなどはけろりと忘れて、「人間の隠し所は脇間に置くと申されました」と復命した。コタンカルカムイは「いかにも!」と思ひ、その通りに人間を造つた。おかげで、今の人間は、恥ずかしい思いをせずに暮すことができるのである(胆振国幌別町の伝承)。

(四) コタンカルカムイのもとへ生物が一つ一つやつて来て、交合の季節を訊いた。コタンカルカムイはニコニコしながら、「汝は某の日、汝は某の月」と申渡していると、そこへ馬が来た。「汝は春がよからう」と神様がいうと、馬は喜びのあまり、神様の傍から後脚を蹴立てて駆け出したので、土くれがはねてコタンカルカムイの眼の中へ入った。そこへ人間が来て、「わたくしは、いつがいいでしょうか?」ときくと、神様は目に物が入つて痛くてたまらない際なので、「うるさい! いつなりと、勝手にしろ!」とどなりつけた。それで人間のそれには一定のシーズンが無いので

ある(胆振国幌別町の伝承)。

(五) 大昔、アカピラ(石狩国空知郡赤平?)という所で、コタンカルカムイが熊に襲われて負傷した。それを聞いてトレシ(*tutesi* その妻)が泣きながら夫のもとへ駆けつけた。その途中で唾を吐いたらそれが白鳥になった。だから白鳥は今でも女の声で悲しげに泣きながら空を飛んで行くのである。また手ばなを飲んで投げたら、その柔かな鼻汁が蘆(*sup-ti*)になり、硬い鼻汁が荻(*sup-ti*)になった。それから夫の許へ着いて介抱し、一緒に天国に去った。去るに当たって、人間界の物を身に着けて天国へ入るわけにはいけないので、今まで身に着けていた物はすべて投げ捨てた。その際「モウル」(*mour* 肌衣)を海に投げたのが「アトイコルエカシ」(*atuy-korekasi* 海を・所有する・翁)すなわち「エチンケ」(*echinke* 亀)になった。「ボンク」(*pon-kut* 貞操帯)を海に投げたら、それが「アッコルカムイ」(*at-kor-kamuy* 紐を・持・神)すなわち蛸になった。昔、「カッケマツ」(*kaike-mat* 貴婦人)は八本の紐で編んだ貞操帯を身に着けていたのである。最後に、その時地に落ちた「ホヌマ」(*ho-numa* 陰毛)が「ラベン」(*rapempe* ススキ)になった。だからススキというものは春になると群がって生えるのである(胆振国勇払郡穂別村の伝承)。

(六) 昔、コタンカルカムイがシコツの巴拉ト(支笏湖)を造ってそこへ魚を放した。その後どの位深いかを見るために、その中へ入って行ったら丸まで濡れた。コタンカルカムイは「俺は海の中へ入っても、膝までしかぬらさぬのに!」と怒って、せっかく自分が放した魚を皆海へ投げてしまった。その時雌魚が一匹だけ残って、それからアメマスが出来たのである(胆振国千歳市の伝承)。

三 コタンカルカムイのイム

アイヌの口承資料の中に、コタンカルカムイのイムという短い詞章があって、難解をもって鳴り、それが何の意味

であるかも知れないに、ただ口調がいたために各地のアイヌの間に唱えられていた。次にその詞章を数篇、原文対訳で示し、簡単な解説を加えておこうと思う。

(一) 人間の始祖たるコタンカルカムイが、或日鯨をヨモギの串に刺して炙っていると、突然その串が折れて、鯨が火の中に落ち、ジュウツと燃え上ったので、びっくりして尻餅をついた。そのとたんに次のようにイムをした。

noya ari
ヨモギの串で

chi-ma awa
炙ったら

a-imanit-ko-kay.
焼串がぼっきり折れた。

rep ta an kamuy
沖にいる神

rehe tapne
の名は

Hure-kamuy ne.
フレカムイだ。

kim ta an kamuy
山にいる神

rehe tapne
の名は

Sipasipa ne.
シパシパだ。

uko-kor poho
その間に生れた子

rehe tapne
の名は

Rikuntuna-
リクントナ

haituna ne.
ハイトナだ。

kotan osmak ta
村の後に

poro to an wa
大きな沼があつて

horepasi

沖から

nise kusu yan-kur

水汲みに来る神

kamuy-sinta

の航空船が

kurutun.

空にゆらゆら

okimun

山から

nise kusu san-kur

水汲みに来る神

kamuy sinta

の航空船が

kurutun.

空にゆらゆら

hai ku-ramu i

あゝびっくりした。

沖という語は、家の中では炉の中心部をいう。そこにいる神の名の「フレ・カムイ」というのは、「赤い・神」ということで、火をさすのである。山にいる神の名の「シバシバ」は、おそらく「スワツ・スワツ」(Suwat-suwat)が訛ったもので、「スワツ」は鍋を吊す自在のこと。その間に生れたという子の名「リクントナハイトナ」は、「リクン・トナ・ハイ・トナ」(rikun-tuna hai-tuna 上方の・火棚、痛い・火棚)の義である。「シンタ」というのは、揺籠のこととで、天井から縄で吊ってその上に赤児を寝かせて縛りつけ、それを老婆が前後に押し動かしながら、

mokot sinta

ねんねのお船が

ran ran

降りたぞ降りたぞ

hoo chipo

そらこげ

hoo chipo

そらこげ

などと子守唄を歌ってあやすものである。形は火棚に似ている。アイヌはこの揺籠を舟と考え、古謡の中では神々が

これに乗って空中を航行すると語られている。従来これを神駕と訳したが、それはアイヌの氣持を知らない者の訳語だった。樺太の英雄詞曲ではそれを「サランベ・ボン・チ」(sarampe-pon-chig 絹布の・小さな・舟)とも称する⁽¹⁾。全体の意味は、——家の中で魚を焼いていたら、焼串が折れて、魚が火の中にくるげ落ち、ジュウと燃え上って、自在の繩に火がついた。びっくりして飛び上ったら、上の火棚にいやというほど頭をぶつけた。人々が駈けつけて、水樽から水を汲んで来ては掛け掛けして、やっと火を消しとめた。火棚がまだ宙にゆらゆら揺れている。あゝびっくりした!——というような意味に解される(胆振国幌別町の伝承)⁽²⁾。

(二) サマイクル——これは後で説くようにコタンカルカムイの別名である——が或日弓を仕掛けていると、突然弦がぶつりと切れた。びっくりした拍子に次の様にイムをした。

opasi-an-kur

川下にいる神は

Suwasuwa ne ike

スワスワであって

ya-ke wa an-kur

その岸にいる神は

Tonchikama ne ike

トンチカマであったが

uko-uturu

その中間に

poro to onne to

大沼古沼が

an wa ne ike

あったのに

tu-suy pa chi-aunke

二度頭をつっこみ

re-suy pa chi-aunke

三度頭をつっこむ

hutatawe!

あゝびっくりした!

こゝで「スワスワ」というのは、枝がたくさんついたまま立ち木を切って来て、その枝の先を適当な長さに切りつ

め、これを家の前に立てて、肉やその他のものをかけて乾すものである。地方によって「ニアウ」(ni-aw)とも「ナウ」(naw)ともいい、樺太では「ラハカイ」(raxkay)といっているものである。「トンチカマ」は「敷居」のこと。沼というのは庭をさす。びっくりした拍子に戸口に駈けて出たり入ったりうろろしていた——というのであろう(北見国美幌コタンの伝承)。

(三) これもやはりサマイクルが弓の弦の切れた際にびっくりして発したイム。

raykuri! raykuri! 「ちきしょうめ! ちきしょうめ!」

o-sir-penan kotan そう叫んだ声が

o-aw-sitayki. 川上の村までとどいた。

o-sir-penan-kur 川上の酋長が

o-so(y)-o-terke 戸外へ飛び出して

o-itak awe いったことは

ene ani: こうである——

tan-pa-an-pa 「今年という年は

nekona an なんてまの悪い

pa ne kusu? 年だろう?

o-iso-kot-kur 幸もち彦が

o-iso-kot kun 幸をもったら

manu kusu sir-ki! あんなことはいうまいに!

ani hawki kane といいながら

aw-o-terke.

家の中へ駈けこんだ

hu-la-ta-wei

あゝびっくりした。

これの本当の意味は、やがてコタンカルカムイの正体が明らかになると共に明らかになるであろう(北見国網走郡美幌町の伝承⁽³⁾)。

註

1 金田一京助『北蝦夷古謡遺篇』一一八ページにもこの語が見えている。

2 知里真志保『アイヌ民俗研究資料第二』六四―五ページ。但、本文の真の意味は古代に於ける巫者のト占を示すものであろう。ヨモギの串はト占の具だったと思われ、またフレ・カムイ(赤い・神)というのは多分いわゆるカムイ・アベ(御神火)、すなわち巫術を行う際に焚く神聖なる火を意味したのだろうと思われる。

3 前のイム及びこのイムは共に弓トの存在を物語るものであろう。祭儀の際に弓を以てト占を行いその結果によってその年の狩漁の吉凶を判断した古代の事実を、この第三のイムは語っているように思う。このイムに於てはト占は凶と出たのである。

四 イムの起原

イム(imu)というアイヌ語には適当な訳語がないので、今まで慣例に従って原語をそのまま用いて来た。ここで、改めてその意義に就いて一応の説明を与え、ついでにその起原を明かにしておきたいと思う。

イムの用語例をしらべみると、おおよそ三つの意義が区別されるようである。

その一は、ひろく一般的な軽い意味のものである。何かに驚いた拍子に飛び上るとか、あらぬ文句を口走るとか、またその口走った文句とか、それらをイムというのである。その際口走る文句は個人個人で一定していて、目前の事

象とは何の關係もないものである。概して卑猥な文句が多く、——hepei! だの、hepeko! だの、「heppe 落ちた!」だのの類である。胆振の幌別に、驚いた拍子に、「achika nepkor an-pe opatachi!」(汚いみたいな者が下痢糞たれた!)とイムする男があった。また天塩の名寄に、「e-chichimpoke sake kure!」(てめえのチンポに一杯のませろ!)とイムする男があった。樺太アイヌの植物名に「イムキナ」imu-kina (イムをする・草)というのがある。ホウセンカ科のキツリフネ(*Impatiens Noli-tangere* L.)の茎葉をさすのであるが、その熟した蒴果に触れると、あたかも物が憑いたかの様に、果皮がくるりと捻れてしまう。その様子がすこぶるイムを思わせるものがあるので「イムする草」と名づけたのであろう。それはまた「ホベヌ・キナ」hopenu-kina (びっくりして跳び上る・草)ともいわれる。それによって、イムが、びっくりして飛びあがる動作をも意味することは明かである。

以上の例によっても分る通り、何かに驚いた拍子に発する反射的な動作、叫び、またはその叫んだ文句をイムというのである。「コタンカルカムイのイム」という場合のイムをこの意義に取って、「コタンカルカムイが驚いた拍子に叫んだ文句」と解している者が、おそらく今のアイヌの老人の中には多いであろう。けれどもイムの本来の意義がそんな単純な所になかったことは、おいおい明らかにして行きたいと思う。

イムの第二義は、今一般に学者が使っているものであって、アイヌ人の間に往々認められる、ある特定の刺激に対する一種のヒステリー反応であり、何かに驚いた拍子に発作的に行動する特殊の病的症状をさすのである。その病的症状に二種あって、一つは人が右といえば左、左といえば右というぐあいに、全然外来の刺激に従おうとせず、理由なく反抗する風を示す能動的な拒絶症、いわゆる「命令的拒絶症」(Betehlsnegativismus)であり、もう一つはいわゆる「反響症状」(Echosymptome)で、それには相手の言語を反射的にそのまま繰返す「反響言語」(Echolalie)と、相手の動作をそのまま真似る「反響動作」(Echopaxie)とがある。樺太のイムには、この後者の例が支配的であった。例えば、初めて氷上でアザラシを射当てて喜悅のあまり突然イムを起して、のたうちまわるアザラシの真似をした例

があり、また飛行機の飛ぶのを見て突然イムを起して無意識にその真似をやっていた例もある。興味ある例としては、ある特定の言葉が暗示的刺戟となつて、特定の形式でイムを起す様に習慣化したものがある。樺太の東海岸の諸所で半生を漁夫として送つた男、漁場で鰯粕の入つた俵を担ぎ上げるのに「ヤンサノ」という掛声でかつぎ上げ、それを地上に「コリヤサツ」と投げおろすのが習慣であつた。この男のイムは、戸外に在る時でも屋内に坐つてゐる時でも、誰かが傍で「ヤンサノ」と叫ぶと俄然イムを起して、かたわらにあるものは、物だろうと人だろうと一切おかまいなしに担ぎ上げて、「コリヤサツ」と投げ出すのであつた。

イム症状を誘発する刺戟は、必ずしも正常な知覚に限らぬ。幻覚によつてもイムは起るのである。先年或アイヌが夢を見て人殺しの凶行を演じたことがあつた。

以上の二つが、現在までに知られてゐるイムの意義である。その内第一より第二の意義がより古いものであらうといふことは容易に察しがつく。しかし、イムは、その用語例から、さらに古いと思われる第三の意義が引出されるのである。北見地方の古謡「サコルベ」(sakorpe(英雄詞曲))の中に次のような一節が見出される。

kacho tom an-e-kik

大鼓の胴を打てば

kacho rek hawe

太鼓の唄う声

kani-haw ne

鏘然の音して

uwetunuyse

美しく鳴りわたり

tu usa imu

跳躍が二つも

re usa imu

跳躍が三つも

an-u-tom-kote

つながって出る

ney wa ek tusu

どこから来る巫謡

ne hawe ne ya

なのだろうか

tu tusu chikay

二つの巫謡のふし

re tusu chikay

三つの巫謡のふしが

e-tanne-keke

長々と続く

ここでは、イムは、巫者が異常意識に入つて反射的に行う跳躍を意味している。これがイムの第三義であり、今まで挙げたイムの意義の内では原義に近いものと思われる。だとすれば、その様なイムを行ったというコタンカルカムイとは、いったい何であつたのだろうか？

五 コタンカルカムイの異名とその語原

コタンカルカムイについては、今まで挙げた資料及び説き来つた所によつて、(a)「人間の世界を創造した神」であること、(b)「海の中へ入つても膝までしか濡れない」ほどの巨漢であること、(c)イムをする——すなわち巫術を行う神であること、等が明かになつたのであるが、北海道の中東北部(石狩・天塩・北見・釧路・十勝)では、さらに、(d)“arke kamuy arke nito”(なかば神なかば人)と形容され、(e)別名が「サマイクル」ともいう神だと古老はいつている。「サマイクル」という他にも、この神は非常に別名の多い神であつて、地方により、或は場合により、いろいろな名で呼ばれている。そこで、この神の正体を明かにするために、ここではそれらの別名を列挙してその意義を検討してみようと思う。

(一)「コタン・ヌ・クル」Kotan-nu-kur これは千島に於てマカンル島を始め、多くの島々を造つた神で、半神半人であり、海中に立てば頭は空を突き抜け、水は膝の高さまでしかないという巨大な体を持ち、年老いてから、オ

ンネコタン島の山上で鯨をヨモギの串にさして焼いているうちに、ヨモギの串が折れて、鯨と共にビモイ湖中に転落してそれっきり失せてしまったと伝えられている⁽¹⁾。「コタン・ヌ・クル」(kotan-nu-ku)とは、北海道のアイヌ語に直せば「コタン・コル・クル」(kotan-kor-ku)で、「コタンを・もつ・神」の義である。但、北海道の「コタン・コル・クル」は現在転義して酋長の意味に用いられている。コタンコルカムイと酋長の関係は、やがて明らかにする機会があるであろう。

(二)「アイヌラックル」Aynu-tak-ku 人間文化の基を開いた神として胆振や日高の沙流地方に於て尊崇される神である。この地方で「オイナ」oyna と称する神話は、この神の事績を伝えた物語である。この語の意義について、金田一博士は次の様に説いて居られる。

——アイヌラックルは即ち ainu(人) tak(匂) ku(人)、即ち「人の匂の人」の義である。『アイヌの研究』二三〇ページ)

——その意味は「アイヌの匂ひの人」「人間くさいおかた」、即ち「神ではおありなさるけれども、我々と同じに衣食し、我々と同じに熊狩でも、角鮫突きにも出かけられ、全く我々に近いおかた」といふ親しんだ尊称である。『ユーカラの研究』二七一ページ)

ところで、「アイヌラックル」を「人の匂の人」「人間くさいおかた」と訳すのは正しいであろうか。訳語それ自身に於て矛盾が感じられはしまいか。これは「クル」ku という語に対する検討の不足から来た誤訳である。パチラー博士の辞書を見ると、この語を独立の名詞として扱い、「人」なる訳語を与えている。しかし、これも間違いである。今のアイヌ語では「クル」は接尾辞にすぎず、動詞或は形容詞に付いて「……するおかた」という意義をあらわすこと、金田一博士の訳語の通りである。しかしながら、ひろくこの語の用語例をしらべてみると、古くは独立の名詞で、「神」或は「魔」の意味をあらわす。日本語から「カムイ」kamuy(やはり「神」及び「魔」の意をもつ)という語

が取り入れられ普及される以前は、名詞として自由に用いられたらしい。

魔の意の用語例としては、「クレミク」*kur-emik*「魔・に・吠える」(犬が虚に吠えること)、「クルコトナシ」*kur-ko-tunas*「魔・に・早」(魔が憑きやす)等、等の用語例がある。悪口に使われる「ライクル」*raykur*(畜生! 野郎!)などの「クル」もこの意味であって、本義は「ライ・クル」*ray-kur*(死・魔)の意味である。これを「死んだ・お方」などと訳しては悪口にはならないであろう。

次に神の意としては、無数に例があり、「ヌプリコルクル」*nupuri-ko-krur*「山・持つ・神」(熊)、「トセリキンクル」*tuse-rikin-krur*「綱・で・登る・神」(蜘蛛)等、神名を形成する「クル」はすべてこれである。

それから「神の様に貴い人」「貴人」をさす、「コタン・コル・クル」*kotan-ko-krur*なども、始めは「村を・所有する・神」の義であったのが、後には酋長の義になり、「村を・所有する・おかた」というように解されている。

異人をさす「クル」もこれである。「クル・マツ」*kur-mat*「異人の・女」といえば日本婦人をさす。千島を古く「クルムセ」といったのも、おそらく「クル・モシリ」*kur-mosir*「異人の・島」の義だったのである。

これで「クル」の意義がほぼ明かになった。そこで再びもとへ戻って、アイヌラックルの語義はどうかと問うならば、これは明かに *aynu-rak-krur*「人・くさい・神」の義であり、「アルケ・カムイ、アルケ・アイヌ」——半神半人であることを示すものである。

(三)「オアイヌオルシクル」*Oaynuorushkur* 北見地方でいう。その地方の「サコラウ」*sakoraw*(神謡)に出て来る。

「オ・アイヌ・オルシ・クル」*o-aynu-orush-krur*「そこから・人間が・発生した・神」の義。人間の始祖を意味する。

(四)「ワリウネクル」*Warivunekur* 胆振及び日高の沙流でいわれる。語原は、*o*(そこから) *-uware*(人々が繁殖した) *-iw*(者) *-ne*(である) *-kur*(神)の義で、やはり人間の始祖たる神を意味する。

(五)「ヤイレスポ」*Yayresupo* 樺太の「オйна」(*oyna* 神謡)に出て来る。「ヤイ・レス・ポ」*yay-resu-po*「自ら